魔導戦記マテリアルなのは

可能性の出来損ない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導戦記マテリアルなのは

【Ｎコード】
Ｎ０９８３ＢＡ

【作者名】
可能性の出来損ない

【あらすじ】
落ちこぼれの魔導師レイヴン。何時も、ハブられる人生に好機が訪れた？
この作品には、なのは、フェイト、はやても出ますが、死に役です。
アミタとキリエの二人も出ます。

第1話　奇妙な関係？（前書き）

マテマテフェイの作者と同じです。
今回は、なのは達では無く、マテリアルが主役です。
シュテル…真面目な優等生。行動が独断な事がある。
レヴィ…他人の迷惑を気にしない。一応、教導官。
ディアーチェ…ユーリには甘い王様。最近はシュテルが言う事を効かないので、お困り

第1話　奇妙な関係？

「大丈夫ですか、レイヴン・ロイト」
目を開けると俺は、記憶の中に残る幼い少女に、そっくりな少女に助けられる。シュテルと名乗る彼女は現状を理解できぬ俺に出来る範囲で事の重大さを述べる。
「ウォーの侵攻を止めぬ限り、私達は星と共に消える」
シュテルの言葉【ウォー】俺は知っている気がする。悪魔と呼ぶに相応しい存在【ウォー】俺は、何処で知って今まで何処で生きていたのかも分からなかった。
「今、あなたを死なす訳には行きません。此処は私が礎となりましょう」
迫り来るウォーの中には、逃げ遅れた人の臓器や腕、頭と言った者が紛れ込み、シュテルの仲間であるレヴィやディアーチェ、ユーリなどの残骸も確認できた。シュテルは小さい声で俺に何かを言うが、消え行く意識の中で俺は無残に散る彼女の姿を見るだけだった。
頭部に強烈な痛みを感じると、俺は目を覚ます。
「起こす時は優しくと言った筈だぜ、シュテル」
「起きない方がいけません。私は常に最善の方法を取るだけですよ」
静かに朝食を食べるシュテルに俺は納得のいかぬまま、家を出る。
此処は第1管理世界ミッドチルダ。
魔法文明が発達した世界で俺とシュテルは暮らしている。俺は局の中でもギリギリで入れる程の落ちこぼれ…対するシュテルは一つの部隊を指揮する隊長の資格を持ち、数々の難事件を解決する優等生だった。何故、落ちこぼれの俺とシュテルが同居しているのかと言うと、話は一年前にさかのぼる。まだ見習い魔導師だった俺は、何時も落ちこぼれと言われ、ろくに訓練も許され無かった。来る日も来る日も他の人の手伝いに明け暮れた頃、シュテルと会った。
「ちょっと来てください…」

出会いは突然、行動も突然…俺は何も分からぬまま、シュテルに連れられ訓練場へと来る。最初は、自分の魔法を俺に見せるだけだが、突然、デバイスを渡して俺に魔法を使えと命令する。仕方なく俺は自分が持つ技術や知識をフル回転させ、シュテルの注文通りに魔法を使う。

「荒削りですが、まだ伸びますね。流石は私の夫です」

「はい…？」

俺は何を間違ったのだろう…気づけば、平然とシュテルが家に居るのが当たり前となり、俺とシュテルの奇妙な同居は始まった。何を持って、シュテルは俺を選んだのか、話す気も無く俺自身も興味が無いと言えば無かった。別に同居が始まったからと言って、何かが変わる訳でも無かったし、俺とシュテルの差は開いて行くばかりだった。俺も弱い自分をどうにかしたいとは思うが、自分の魔法と言うのが、良く分からず管理局に入っても雑務ばかりが俺の仕事になっていた。

「ほら、落ちこぼれ君。これもよろしく～～～」

雑務仕事の大半を俺に任せて、局の人は遊び歩いていた。俺は苛められていると意識しながらも、決して仕事が嫌な訳では無いので、シュテルに話さず、俺は自分の仕事に誇りを持って取り組んでいた。

「レイヴン～～～仕事は進んでるかい～～～？」

「何の用ですか？レヴィ教導官」

面倒な事は避けたい為に俺は、書類を整理しながら、慌ただしく演技をする。レヴィの方も俺の芝居に気づき無理やり近づく。シュテルとは公私ともに仲が良く俺も魔法の特訓をしてもらう事もあった。だが、シュテルが居ないとレヴィは俺の妨害しかしない為になるべく管理局内で会いたい人物では無かった。

「今日は暇だし、久しぶりに訓練しようか？」

「ほう…レヴィ、我に逆らう気か？」

声を聞いた俺は、ため息をついて今、来た人物を見る。ディアーチェ…シュテルとレヴィの上官にして、俺の特殊戦技を教える師匠で

もあった。ユーリが傍に居る時は、素直だが俺やレヴィには厳しく特にレヴィは、自分の行動を制限される為にディアーチェにはあまり会いたくは無かった。
「人に教えるのは、面倒だよ～～～」
「我の顔に泥を塗る気か？」
今にも怒りが最高潮に達しそうなディアーチェに対して、レヴィは怒りを買う行動しか取らない。此処でエクスカリバーを撃たれれば俺の居場所が無くなる事は明確だが、二人の喧嘩を止める術は無く、俺はシュテルが来ることを願う。
「消え去れ、エクスカリバー！！」
「極光斬！！」
「黙って下さい。二人とも」
後ろから来たシュテルは二人の頭部をルシフェリオンで殴る。デバイスで殴られた二人は、医務室に直行し、邪魔者が消えた事を確認して、俺の所に来る。
「今日は何時頃、終わりそうですか？」
シュテルの言葉に俺は分からないと答える。俺の答えを聞いたシュテルは、黙って俺が行う雑用を手伝う。流石にエースの方にさせる仕事では無い為に俺はシュテルから資料を奪い取って、自分の仕事を始める。少しずつでも成長する俺に、いちいち感動を覚えるシュテルは、俺の顔を自分の顔に近づけ、キスをする。
「私は決めました。これからは、あなたの隊長になります」
「マジッスか…」
一度、決めた事は曲げない性格だと分かっている俺は、ため息をついて仕事を再開する。シュテルは、早速、勝手に俺の所属を変更する手続きへ向かう。流石に管理局も甘くないと考えて、仕事を続ける俺は、次の言葉に驚きを隠せなかった。
「許可を得ました。移動です」
「冗談だろ…」
「いいえ、本気です」

ニッコリと笑うシュテルに俺は悪意しか感じなかった。そして俺やシュテルが平和に過ごす頃、ある世界では…悪魔が行動を開始する。第９７管理外世界、武力を持たぬ世界に悪魔に対抗する術は無く、多くの者は抵抗も許されずに殺される。

「制圧完了…対象は発見できず」

機械の様な兵器は、家の残骸から既に息絶えた少女の体を見つける。情報にある少女に近いが、目つきや髪型その他にも多少違いがあり再生出来ぬ様、腕と胴体を離して、首と胴体、足と胴体も離す。

「今回も外れか…急がねばな、星を断罪する者が世界を渡る前に」

ボスとも言うべき風格を持つ男は、転移魔法を使用し次なる目的地へと向かった。

第1話　奇妙な関係？（後書き）

シュテルの指揮する部隊に編入する事になった俺は、魔法の特訓を受ける事に！？
次回　気合と根性！！
正直、俺は無理だと感じた…。
次回もお楽しみに

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0983ba/

魔導戦記マテリアルなのは

2012年1月2日05時52分発行